

心の靈性とは何か—繋がり、合一、区別の靈性概念の提案と靈性的免疫力 *

執筆・翻訳：崔 多蔚 (チェ ダウル)¹

心の分析と靈性的免疫力

心には「信じる」機能がある。特定宗教の信者だけの話ではなく、心を持つ全ての者は大なり小なり「思い込み」を持っている。これを念頭に置いて、自身の想定した「常識」「真理」「当たり前」はあくまでも相対的な思い込みであることが分かるのであれば問題はない。しかし筆者をはじめ、そうでない場合が非常に多い。これは最近に始まった問題ではないものの、COVID-19状況においてより深刻化している。多くの人々がフェイクニュースを信じ込み、自他をたやすく区分し、誰かに偏見を持つ。無論フェイクニュースを流布し盲信を促す方が悪い。しかし一方でよく考えて見る必要がある。もしかしたら、「思い込む(何かを当たり前にしてしまう、当たり前にすることができる)」力は、我々の心にあるのではないだろうか。自分の考えが盲信・偏見かどうかを判断しきれているのだろうか。ここで一度「心」について分析してみたいかだろうか。筆者は心の分析が「思い込み」を相対化できる「靈性的免疫力」の養い方であると考えている。そのため本文では心の靈性に対する仮説を扱うことにする。

ここで扱う「心」について

仮説に入る前に、まず本文で扱う「心」の定義をしておこう。筆者が扱おうとしている「心」とは「クオリア (Qualia、感覚質) があらわれる所」である。クオリアとは我々の意識を構成する「感覚意識」や「経験」等の心的現象のことを意味する。例えば「味噌」と聞くと味噌の色、匂い、触感、田舎の風景、家族との食事の思い出、亡くなったおばあちゃんの姿等々が思い浮かぶが、この心に思い浮かんだ意識、感覚、経験等がすべて交じり合ったイメージがそれである。周知の通り他人のクオリアを直接見る術は現在無く、自分のクオリアすらも100%再現して他人に伝える方法は無い²。この心的現象を言語・絵・音楽・理論等に翻訳し表現する方法³はあるものの、受け手側の心に表現者と同じクオリアがあらわれるという保証はない。こういった理由から「心」は「機能は大体分かるけれど内部構造は分からない」という意味で「ブラックボックス」と呼ばれ、心理学や脳科学よりは主に哲学で扱われてきた。今日でもクオリアが脳と関りがあるという研究はあるものの、それが正確にどこでどのように働いているのかは分かっておらず、今後明らかにできるのかどうかすら分からない⁴。

クオリアがどこでどのようにあらわれるのかはとても重要なテーマである。しかし本論考において論じようとしている所とはまた別の問題であるため、ここでは一旦保留し便宜上「心」と称する。ちなみにこの「心」という用語設定も一つの「思い込み」であり「靈性」である。そのため「心」という名称や設定がしっくりこない場合は「頭」や「脳」、「考えが生じる所」

* この文章は『市民白書 早まった未来、新たな日常 (仮題) -韓国社会COVID-19市民白書II-』(モシムンサラムドゥル、近刊予定)へ寄稿した原稿を翻訳したものである。刊行予定日は未定(2020.6.15時点)。

¹ 東北大学大学院文学研究科日本思想史研究室所属・未来型医療創造卓越大学院プログラム 博士課程前期1年。主に思想史、宗教学、心の哲学、認知科学、人工知能、医療・生命科学に関心を持っている。

² ヴィトケンシュタイン『Philosophische Untersuchungen』(1953) 'private language', 'Beetle in the box'

³ フランク・ラムジー「Theories」(1929), 'primary system' - 'secondary system'. 所謂 'Ramsey sentence'

⁴ 神や超自然的なものに反応する脳の部位については研究結果は出ている者の、クオリアの中身までは依然と確認する術が無い。また部位が分かったからといって、どのようなメカニズムで表れているかについては多数の説があり、その説によって「心」「クオリア」を論じる立場も大きく分かれる。

などお好みの呼び名に置換えて読んで頂いて構わない。また本文において扱う心の仮説は上記のように、今のところ本人でなければ確認の仕様が無い。したがって、ここでは主に筆者本人の心の分析を扱うことになる点ご了承をお願いしたい。読者の皆さんもこの文を手掛りに、一度ご自身の心を直接分析してみたい。

心の霊性仮説1「繋がり」：心は実在しないものと繋がることのできる

一つ目の仮説は「心は実在しないものと繋がることのできる」である。実在しないものとは一般的には「虚像」「妄想」「フィクション」「超自然」「超越」と呼ばれるもの等を意味する。例えば、神、死者、魂、天、空想のキャラクター、未来、死後の世界、神秘的な力などである。

我々はこういった虚像や超自然的なものや心で繋がることのできる。例えば筆者は心の中に亡くなった祖母を思い浮かべることができる。祖母は亡くなっていて現在はこの世に実在しない。実在しないにもかかわらず、祖母の姿や声が私の心に立ち現われる。筆者は心に立ち現われた祖母を懐かしく思ったり、感謝の意を伝えることもできる。たまに祖母が作ってくれていたワラビのお浸しや味噌入りとろろご飯を口にするときには生前の祖母との記憶が思い浮かんだりする。今でも亡くなった祖母に対しなぜか心の中で敬語を使っており、タメ口できない。つまり、相手がこの世を去り現在は実在していないにもかかわらず、心において亡き祖母との人間関係は持続している。つまり筆者は実在しない対象と心で繋がっている。

もう少し広く考えてみよう。上の例は相手と生前に関係がある場合だったが、必ずしも関係者の死ではなくとも実在しない対象と繋がることはある。例えば我々は死者の冒瀆をタブー視する。また、たとえ知らない人であっても他人の墓地を踏み台にしたりはしない。物質的にはただの石や土であって生命体でもないのに、なぜだろうか。これは我々が死者の尊厳を一部認めているからである(生者のそれと完全に同一ではないにしても)。現在は実在していないにもかかわらず、その人の尊厳・生命性は社会的・宗教的にこの世に残っている(と見做されている)のである。ここで注目したいのは死者の尊厳を認めるにあたって、その者が生前に自分と関係があったとか、遺族がまだこの世に生きていたといった理由とは別にも死者の尊厳が認められているということである。つまり、「死者」そのものに尊厳が内在していると見做されている。我々はこのように亡き者とも社会的・宗教的に繋がることのでき、実在する者の如く扱うことができる。

これは死者に対してのみではない。心では空想のキャラクターに対しても実在するもののように繋がることのできる。例えば筆者はゲームキャラクターがプログラミングされた単なるデータの塊であることを知っていながらも、ゲーム内のヒトデに毎日食事を与え(別に与えなくても死なない)撫でたり遊んだりする(撫でると設定された表情や仕草を取ってくれる。可愛い)。小説の登場人物を敬慕したこともあれば、漫画の主人公が危険を免れるよう祈ったこともある。ニュースで見ず知らずの他人の交通事故情報に正直あまり悲しみを感じ得ないが、ゲームや小説など物語上で筆者が親しみを持つ登場人物・キャラクターが命を落とすことがあったら、実在する友人やペットを失ったときのように死別の苦しみ(Grief)を感じることもある。万が一でも日本で国民的なキャラクターとされるピカチュウやドラえもん、サザエさんがストーリー上で死を迎えることになったら、一定数の人は長年の友達を失ったかのような死別の悲しみを感じるのではないだろうか。それだけ人の心に空想のキャラクターは実在する生命体のような(或いはそれ以上の)ものとして立ち現われ得る。現代人も十分霊性的である。

我々は死者と繋がることができ、空想のキャラクターを敬ったり慕ったりもできる。つまり、実在しないものを社会的に実在するかのように扱うことができる。これは実在しない神々や祖先への祭祀や礼拝、祭り、墓参りを通じてそれらと繋がる行為と類似している。必ずしも特定の宗教や儀式でなくとも、我々の日常の至る所に霊的な面が潜んでいる。そして大事なのは、それらが実在してなくとも社会的に繋がっている(と見做される)以上、我々の思考や行動は影響されるということである。お天道様が見ているから身を慎む。祖先が託された血と代を継ぎ祭祀を大事に行う。人が乃ち天であるから他人や自分を天の如く扱う。ゲーム内で育てているヒトゲを実際の生命体のように世話することもできれば、たかがデータの塊だと簡単に削除ボタンを押すこともできる。実在しないものを実在するかのように錯覚できる能力。そのような能力を心は持ち備えている。これが筆者の言う「繋がり」の霊性である。心はいくらでも墓石に故人の尊厳を見出せるし、ただの石ころにもできる。心はいくらでも対象を神のように敬えるし、消耗品のように使い捨てることもできる。

心の霊性仮説2「合一の霊性」：心は対象と一つになり得る

二つ目の仮説は「心は対象と一つになり得る」である。対象と一つになるとは、区分の境界が曖昧に薄れるということである。ここでいう「対象」にはもちろん「実在しないもの」も含まれ、「区分」には「自他認識」が含まれる。自他認識区別の境界線が曖昧になる代表的な例には「自分の名前」が挙げられる。自分の名前は先天的なものでもない。生まれつき痣として肌に刻み込まれたり、発音が脳内に込められていたりしている訳ではない。厳密に言うと自分の名前は「自」ではなく「他」である。にもかかわらず我々は「自分の名前」を「私」と思い込むことができ、「自分の名前」に悪口を言われると気分を損ねる。つまり「私(自)」と「自分の名前(他)」の間の境界線が曖昧になっており、自他が一つになっている。

仮名の場合はどうだろうか。例えばオンライン上のアカウントやニックネームはもちろん「自」ではなく単なる設定である。加えて、仮名の対象は社会的に自分とは全く別的人格体である。この仮名の人物が自分と同一であることが知れ渡らない限り(知れ渡るとしても、「元の私」と「仮名の私」の区別がついている限り)仮名に対する評価は「私」に対する評価ではない。にもかかわらずその仮名(もしくは仮名的人格体)が悪く言われると、気分を損ねるときがある。自分が直接悪く言われたわけでもないのに、なぜ、たかが設定である仮名(的人格体)に対する評価が自分の感情に影響を与えるのだろうか。それは心において「私」と「仮名的人格体」が一つになっているからである。グーグルやツイッターアカウントと「私」が合一しているのである。同じくオンラインゲームのキャラクターや、芸能人の芸名、作家のペンネームがこれに該当する。ゲームの中のキャラクター(アバター)が侮蔑されて苛立ちを覚えたことはないだろうか。そのキャラクターが危険に陥ると自分も共に緊張し、成長すると自分の事の如く喜びを感じたことはないか。ある意味オンライン上の仮名やゲームキャラクターという「社会的な人格体」と一つになるという経験は、現代において最も代表的な霊性体験なのかもしれない。(もちろん合一に至らない人もいる。そもそも霊性体験というのは韓国の「巫俗」や日本の「巫女」、「イタコ」のように、日常から霊的な心の状態になれて初めて可能なことである。)

もちろん名前や仮名だけではなく自然、家族、地域、民族、国家、性別、宇宙等々、あらゆるものが合一の対象になり得る。いわゆる物我一体、天人合一、自他合一である。対象に自分が含まれ、自分の範囲に対象が含まれたりする。自分の国が悪く言われたり損をしたりすると私が損をしたかのように感じ、自分の民族が偉業を成すと自分の事の如く喜ぶことができる。しかしこの「一体」「合一」の範囲は相対的で変動的である。在外同胞の偉業を誇らしくしつ

つも、国家支援金の問題になると対象から除外したりする。その時々心の状態により合一の程度や対象が変わるのが霊性体験の特徴である。自然と一体化するためには五感をフル稼働させ瞑想を重ねなければならないように、国民が一つになるためには国家的危機に陥ったり、ワールドカップでベスト4に進出する等といったときの心的状態の条件がある。

ここまで見てきた仮説1・2は比較的一般的な霊性理解「外部との繋がりや合一」を前提とした仮説である。筆者も半年前まで仮説1・2のような場合が「霊性的」だと考えてきた。一般的に「霊性指数(Spiritual Quotient、SQ)」が高いというと、外部との境界線が薄く、一体化や感情移入、共感能力に長けている場合を指したりする。しかし、これはもしかしたら二分法的な区別なのかもしれない。「霊性的」や「霊性指数が高い」といった捉え方はその逆の状態を前提としている。自他区分の境界線がはっきりしており、神や死後の世界や超越的なものに無感覚な状態が「霊性的ではない状態」ということである。果たしてそうだろうか。区分や境界線は自然的でも絶対的なものでもない。心の「自」「他」は予めそれぞれが分けられているわけではない。どこか心の分け慣れた所に境界線を置いているのである。そしてこの境界線があらわれる範囲とその濃度に関しては、これまで論じてきた「繋がり」と「合一」の霊性と関りがある。ゆえに仮説3を立ててみようと思う。

心の霊性仮説3「区分の霊性」：区分の境界線も心の霊性であり慣れである。

仮説2「合一の霊性」では対象との「区分の境界線」が薄まる霊性について扱った。逆に今回はその「区分の境界線」自体も実在しない霊性対象として見て行こうと思う。厳密に考えてみると対象と対象の区分、自他の区分は絶対的・先験的なものではない。目を凝らして見れば、その境界線は非常に曖昧である。ならば、自他の境界線が薄くなる霊性があるように、逆に自他の境界線が濃くなる場合も霊性と言えるのではないのだろうか。我々は心において自他の区分、対象と対象の区分をどのように分けているのだろうか。

再び「私」の範囲について考えてみよう。「私」はどこからどこまでか。これまで扱った「クオリアがあらわれる所」「心」そのものが「私」なのだろうか。それとも「クオリア」それ自体が「私」なのか。そう考える場合もあるが⁵⁾、大抵の人が「私」と称し「自他区分」における「私」のことを「クオリア」や「心」より上位にあるとされる「主体」⁷⁾として連想することが多いように感じる。或いはいま実在している自身の身体そのものが「私」と考えているのかもしれない。複雑になりそうなので、まず「自分の身体の範囲」について少しずつ考えて行こうと思う。

脳、目、鼻、口、耳、手、足は「私」だろうか。「私」に含まれるだろうか。また心臓、肝臓、肺、胃、腎臓はどうだろうか。筆者の感覚ではここまではまだ「私」に含まれる気がする。では髪の毛、髭、歯、爪、血液、酸素、さっき食べた食事…段々と曖昧になって行く。次は限られるかもしれないが、メガネ、入歯、インプラント、義手、義足はどうだろうか。人工臓器や寄贈された臓器はどうか。ここでもう一度考えてみよう。「私」を構成する身体の範囲はどこまでか。恐らく実際に自身の身体を構成している部位であっても、それが「私」というと違和感を覚える場合もあるだろう。筆者の場合は例えば頭や手足の場合は「私」のように感じ

⁵⁾デイヴィッド・ヒューム『A Treatise of Human Nature』(1739) 'Bundle of Perceptions'

⁶⁾バートランド・ラッセル『The Analysis of Mind』(1921)においてラッセルは 'cogito ergo sum' を 'it thinks in me' または 'there is a thought in me' と英訳している。

⁷⁾イマヌエル・カント『Kritik der reinen Vernunft』(1781) 'Apperzeption'. この 'Apperzeption' 自体も霊性であり設定であると筆者は考えている。

られるが、「血液」の場合は「私」という感じはしない。「心臓」の場合は手を当てて鼓動を感じ取れば実感が沸くが、そうでなければ「私」という感覚は薄い。

「自分の身体」に関する問題に関し、最近の認知科学で扱われているテーマとしては大きく「身体保持感(sense of self-ownership)」と「運動主体感(sense of agency)」が挙げられる⁸。前者は「自分の身体を持ち主は私」という感覚を意味し、後者は「行為・動作の主体は私」という感覚を意味する。認知科学においてはこの二つの感覚が自己認識、つまり脳が自他区分をする際の指標としてよく使われる。筆者も「自分の身体」の範囲は概ねこの「身体保持感」「運動主体感」という指標を中心に成長し、慣れて行くうちに形成されているのだと考えている。ただし注意すべきは、この身体感覚の範囲も区分の境界線があやふやになる場合があるということである。その代表的な例が「ラバーハンドイリュージョン(Rubber Hand Illusion, RHI)」である⁹。ラバーハンドイリュージョンとは作り物のゴムの手をまるで自分の手の如く見せることで、ゴムの手に対する刺激を実際の自身の手から感じられてるかのよう「錯覚」させる実験である。この実験は自身の身体の外側(ラバーハンド)を自身の身体の一部と認識できるという可能性、つまり身体部位の境界線が脳の状態によって変わることを表している。特殊な脳の状態では実際の自身の身体より外部の対象が「自分の身体」の範囲に入ってくるのである。つまり身体感の自他区分の境界線は相対的であり、心理状態に影響される。

ちなみに発達障害を患っている人のRHI錯覚実験はその結果に著しく差が出ると言われている。統合失調症患者の場合RHI等の錯覚が過剰に起こり、運動主体感が著しく低下する場合に幻聴が聞こえたり自身の身体の内外部が区分できなくなる時があるという。また逆に自閉症患者の場合はRHI等の錯覚がほぼ起きず、自身の身体の外側に対する感覚が鈍いため筆や球技など自己身体範囲外の道具使用に困難を覚えると報告されている¹¹。もちろん自閉症と統合失調症患者の比率は全体の1%にも満たないとされている。しかし、発達障害を患っていない残り99%の人々の自他認識の境界線が皆一定であるかというところではない。自閉症または統合失調症の傾向は発達障害者判定の有無にかかわらず、誰もが程度は違えど皆持ち備えている。その程度によって区分の境界線が変わるのであれば、結局全ての人の自他区分は相対的であると言える¹²。

一方で巫俗や巫女のように特殊な心の状態(対象との一体化)のプロの場合は「自身の身体」の範囲はどのように感じられているのだろうか¹³。それだけでなく、現代人とは世界観の全く異なるであろう縄文人や、古事記に出てくるような人々、また独特な信仰を持つアイヌの自他区分の境界線はどうだったのだろうか。もしかしたらラバーハンドどころではなく、より外部の

⁸ Koichi TOIDA, Sotaro SHIMADA 「Neural Mechanism for Self- and Other-recognition」 Organized session (chair), The 32nd Annual Meeting of the Japanese Cognitive Science Society, pp.778, 2015.09. (in Japanese)

⁹ Botvinick, M., Cohen, J. 「Rubber hands 'feel' touch that eyes see.」 『Nature』 391, 756(1998)

¹⁰ ラバーハンドイリュージョン実験の映像がナショナルジオグラフィックのYouTubueチャンネルで公開されている。映像で見た方が理解しやすいと思うので参考までに。National Geographic 「Is That My Real Hand? | Breakthrough」 (Youtube : 2015.11.05) 영상링크: <https://youtu.be/DphlmtGRqI>

¹¹ Makoto Wada 「Body ownership illusions in humans and other animals」 『The Japanese Journal of Animal Psychology』 2019, 6p 参考.

¹² そもそもこれは割合の問題であるにすぎず、99%の人の身体区分が正常であると言い切ることはできない。正常とされているだけである。もし統合失調症患者が99%の世界があるならば、自他区分の境界線の「正常な範囲」というものは今とは大分異なっていたであろう。

¹³ 認知科学研究のなかには運動選手のイメージ(メンタル)トレーニングと自他意識に関する研究も注目されている。もしイメージトレーニングが「身体保持感」「運動主体感」を高めてくれるのであれば、逆に五感を外部と繋げる霊性トレーニング・瞑想や座禅も同じく、自他意識の境界線に影響を及ぼすと考えられるのではないだろうか。

世界が「自身の身体」の範囲として感じられていたのかもしれない。

身体範囲以外の「私の範囲」の区分はより相対的である。これは仮説2でも扱ったものであるが、心に現れる「私の範囲」は家族、民族、地域、性別、応援しているスポーツチーム、国家、自然、宇宙など限りなく広がり得る。またどこまで、どのくらいの濃さで境界線が生じているかは人によって異なる。さらに「自他区分」のみではなく「対象と対象の区分」もあるが、これは言及するまでもない程より多様で相対的であろう。(言語が思考の区別方法に影響を与えるという「言語相対性仮説」¹⁴も本来ならば扱いたいテーマであるが、長くなるので省略する。)

どこまでが「私」と「私の範囲」であり、どこからが外部で他者なのか。その境界線はその時々々の心の状態によって曖昧になり、変化する。このように心には相対的で変動的な「区分の靈性(境界線の靈性)」がある。実在していないものと繋がることができ(繋がり)、それらとの境界が薄れ一つになることもあり(合一)、逆にくっきりと境界線を引くこともある(区分)。つまり、心には対象との間に繋がり、合一し、区分があらわれる性質があり、それによって我々の思考と行動は影響され得る。ここでは実在・非実在の如何はあまり問題にはならない。これが「心の靈性」である。

靈性的免疫力の低下—近代は靈性的問題を本当に克服したのか？

このように見ると、宗教・靈性的問題は既に克服された問題として(さらには宗教・靈性・道徳から脱却し理性的個人・合理的思想への転換点となったと)見做す「西欧型近代」も筆者の目からしては靈性を克服したのではなく、単に仮説3の「区分の靈性」が強化されたにすぎないとしか思えない。単に従来とは違う心の靈性状態に移行しただけである。宗教・靈性的問題が既に解決され、本人とは無関係な問題として考えられているという点ではむしろ状況が悪化しているとさえ言える。依然として現代人も特定の情報を真理の如く盲信し、国籍と民族、性別、能力等の区分がまるで予め実在していたかのように扱い、自然と自身を分離して考える。これは信仰の対象が「GOD」や「道」から「科学的事実」「合理的区別」へと移ったに過ぎない。靈性的問題は特定の宗教信者や前近代の人間だけの問題ではない。自身の心に現れる信念の方向を省察しない限り、フェイクニュースも差別問題も無くならないだろう。これが靈性的免疫力の低下である。その影響力の割に、靈性に対する理解があまりにも少なすぎる。ただ、だからといって非実在と実在を分別する能力を伸ばそうと言うわけではない(そもそもそれが可能であるかも疑わしい)。自身の心の特性・思い込みの機能を知り、扱いに注意すべきだということである。

「心の靈性」仮説を考案した理由—思想史研究と靈性的免疫力

ちなみに心の靈性、特に区分範囲の相対性について考案することになったのは東学の天に関する理解をしようとした所から来ている。朝鮮儒学者の天と東学の天はその範囲、交わり具合が違う。また同じ東学であっても、水雲、海月、義菴(1・2・3代目教主)の天はその範囲も感覚も各々異なる。一方で日本のある思想家が扱う天は海月のそれと似たような感覚を覚えることがある。ある時は現代人であっても世界や社会、生態を彼らの天と似たように捉える人も目にする。果たしてこの人たちの心に「天」「人」「世界」はどう立ち現われ、「私」と「他人」

¹⁴ 所謂「サピア=ウォーフ仮説(Sapir-Whorf hypothesis)」と言われる「言語相対性(Linguistic Relativity)」仮説は「言語が思考の枠を作る」といった強い解釈の場合はほぼ認められることは無いが、「言語が思考の区分に影響を与える」という比較的弱い解釈の場合は現在も有効な内容であり、参考になる。この仮説によると色や空間、行為の区分する思考が使用言語によって後天的に影響される。

はどう区分されていたのか。これをより深く理解するために立てた仮説が「心の靈性」である。

無論、他人の心はいくら考えてもその中身の知れない「ブラックボックス」である。しかしそれで問題ない。その「ブラックボックス」から様々な形で排出される諸表現を手掛かりに、文脈を読めば良いからである。だからこそその思想史研究である。

実はこうして仮説を立てたのも考案したのも、「心の靈性機能」を実験や研究を通じて解明したいわけではない。むしろその逆である。心は例えば一握りの土の中に数億の微生物が交じり合い相互作用しているかのように、とても複雑で変動的である。だからこそ一人一人の言葉、絵、声、仕草に出る「表現」の文脈からその奇妙で複雑な靈性の交わりを感じなければならぬ。筆者はこれが生命を知る方法であると考えている。心と靈性は生命現象である¹⁵¹⁶。

また、そもそも「心の靈性」自体が設定でありフィクションである。ただ、それで問題ない。心の靈性が実在するかどうかには拘わらず(たとえこれが偽であったとしても)「自分の心には靈性の機能がある」ということを念頭に置き、自身の心を省察するだけでも「靈性的免疫力」を高められるからである。そしてそれは可能である。なぜなら心は実在しない設定から影響を受けるからである。トートロジーのようであるが実行は簡単である。当たり前を信じる心を分析してみれば良い。自分の心には何との繋がり、合一、区分が生じているのか。靈性には靈性で対処する。それが筆者が考えた靈性ワクチンである。

¹⁵ 誤解を避けるために追記すると、筆者の主張は生氣論(Vitalism)ではない。論じたいのはあくまでも一元論上の「靈性」「心」「生命」である。要はこれらは全て基本的には物理的因果関係を持つ現象であるが、その中身を解明することが不可能に近い。哲学的・思想的にアプローチするべきだということである。無論筆者の立場が答えであるという訳ではない。量子脳異論(Quantum mind theory)のように違う立場の理論にも興味深い点が多い。

¹⁶ 現在筆者の見解は靈性と心に関してはフランク・ラムジーの哲学と、心と生命に関してはベルクソンやホワイトヘッドの哲学に近いのかもしれない。最近ではベルクソンの『物質と記憶(Matière et mémoire)』(1896)と『創造的進化(L'Évolution créatrice)』(1907)をじっくり読み進めている。